

認知症の人に学び
ともにあゆむ

クリスティーン・
ブライデン講演

中

稲垣 絹代



認知症当事者として、従来の認知症ケアのあり方に一石を投じる活動を続けているクリスティーン・ブライデンさんが初来県するという話を聞いたのは今年3月、愛楽園の山内和雄園長と懇談した際だった。山内園長は会場の確保など相談に乗ってほしいという申し出だった。私は「ええーあのクリスティーンさんが沖繩に」と願ってもない話に驚き、喜んだ。

愛楽園とのかかわりは3年前、名桜大学の看護学科の教員として赴任した直後の私に、看護・介護職員を対象にした「認知症看護」について講演してもらいたいという話をいただいたことがきっかけだ。講演は「新たな認知症看護の動向」というテーマで、私はその一つとしてクリスティーンさんの2冊目の著

書「私は私になつていく」の一節を紹介した。

「あなたが、わたしたちと、どういった関わり方をするかによって、病気の進行は大きく左右されます。わたしたちがパーソンフレッド(自分らしさ)を取り戻せるかどうか、そして人々から必要とされ、大事にされているという実感が持てるかどうかは、あなたたちにかかっているのです。(中略)安心感、抱擁、サポート、そして生きる意味を、わたしたちに与えてほしいのです」
この一節が伝える認知症への看護で最も大切なことは、その人の価値と尊厳を認めることである。名桜大学の看護学科は現在、愛楽園の協力で、ハンセン病に対する正しい知識を持ち、歴史的に差別を受けてきた人々から学ぶ「ケアリング文化実習」を

看護・介護者を育てる立場から

生きる意味 考える機会に



札幌市での講演のため来日した時のクリスティーン・ブライデンさん(左)と夫のポールさん(2007年9月、札幌市内)

実施。その後ハンセン病の後遺症を持ち療養生活をしている人々への看護を実施する「基礎看護実習I」を行っている。
私が初めてクリスティーンさんを知ったのは、2003年のNHK番組であった。衝撃だった。
当時、私はすでに大学で認知症の講義をし、実習で多くの認知症の人たちと出会っていた。認知症の入所者が寝かせられたままの大型施設

や、鍵のかかった病床、入浴を待つために廊下に半裸で並ぶ場面などを見てきたが、「安全のため」「人手不足のため」と非人間的な看護・介護を仕方のないものとしてきた。
あれから小規模施設、ユニットケア、グループホームと認知症の人を取り巻く環境は少しずつ改善されてきた。しかしクリスティーンさんが訴えていた「生きる意味」を一緒に考える看護・介護はどれだけ提供できているのだろうか。
私は、看護学生の時代に少しでもそうした問題を考える機会を持ってもらいたいと願う。私もまたクリスティーンさんの本を紐解きながら、学生とともに認知症の人々から学んでいかねばならないだろう。
(名桜大学看護学科教授)

便物認可 第22876号 (日刊)

沖繩 OKINAWA TIMES
タイムス

2012年10月9日 火曜日
(平成24年) 【旧8月24日・先勝】
発行所 那覇市おもろまち1丁目3番31号
(郵便番号900-8678) 沖繩タイムス社
私書箱 那覇中央郵便局293号 ©沖繩タイムス社 2012年